

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	中尾 真由美
<p>主 論 文 題 名： がんサバイバーのがんと治療に伴う症状と就労に関する研究</p>			
<p>【背景と目的】 近年、がん罹患患者数の増加、およびがんの早期発見や治療の進歩に伴う生存率の上昇から、がんと共に生きるがんサバイバーは増加している。しかし、がんとその治療に伴う症状は、がんサバイバーの社会生活のあらゆる側面に長期に渡り影響をおよぼす。特に倦怠感や乳がん内分泌療法に伴う症状は、主観的で他者からは捉えがたく、生命を脅かすほどではないために、がんサバイバーは医療者に報告するのをためらい、医療者からは見過ごされ、緩和されない傾向にある。倦怠感のような主観的症状は、その症状を最も理解している患者の視点から測定する患者の自己報告による評価が適している。患者報告アウトカム尺度のような自己報告尺度を用いて症状を評価することで、医療者と適切に症状を共有し、治療やケアにつなげることが重要である。 一方、症状の社会生活への影響で深刻な問題となることの1つは、就労である。就労はがんサバイバーにとって、経済的安定のみならず社会的つながり、正常性への回復等の重要な意味を持つが、がんサバイバーの就労率、就労能力は非がんの人と比較して低く、その要因の1つはがん治療に伴う症状であることが報告されている。乳がんは就労年代での罹患が多く、5年以上という長期に渡る内分泌療法を受けるため、内分泌療法に伴う症状と就労の関連が懸念される。しかし、この実態はあまり明らかにされていない。内分泌療法中の乳がんサバイバーの症状と就労の関連を明らかにすることは、長期間内分泌療法を受ける多くの乳がんサバイバーのための適切な支援の検討に必要不可欠である。 よって、本論文の目的は、がんサバイバーの経験する主観的で捉えがたい症状の評価に適した方法、および症状と就労との関連を明らかにすることである。この目的を達成するために、以下の2つの研究を実施した。</p> <p>【研究1 日本で使用可能ながんに伴う倦怠感の患者報告アウトカム尺度に関するシステマティックレビュー】 倦怠感とは、がんサバイバーに最も高い頻度で生じる苦痛な症状であるが、最も評価されず、緩和されていない現状がある。本研究の目的は、がんに伴う倦怠感評価尺度の特性を、特に内容妥当性に注目して明らかにすることである。 研究方法は、がんに伴う倦怠感の患者報告アウトカム尺度に関するシステマティックレビューである。PubMedとハンドサーチを用いて、がんに伴う倦怠感の多項目患者報告アウトカム尺度に関する研究論文を抽出した。それぞれの尺度の内容妥当性（倦怠感の概念枠組み、項目内容、項目作成時のがん患者関与、患者負担等）、信頼性、構成概念妥当性、説明力を評価した。 結果として、8つの尺度に関する31文献をレビューし、内容妥当性を含めた妥当性、信頼性の基準を満たす尺度は、単次元尺度ではFunctional Assessment of Chronic Illness Therapy-Fatigue (FACIT-F)、多次元尺度ではCancer Fatigue Scale (CFS)、Hirai Cancer Fatigue Scale (HCFS)、European Organization for Research and Treatment Cancer Quality of Life Questionnaire Fatigue 12 (EORTC-QLQ-FA12)であることが明らかになった。単次元尺度は回答者の倦怠感の程度と生活への影響に焦点を当てる一方、多次元尺度は回答者の倦怠感の感覚に焦点を当てており、それぞれ使用する目的に応じて尺度を選択する必要がある。</p>			

【研究2 内分泌療法を受けている早期乳がんサバイバーの症状と就労アウトカムの関連】

内分泌療法を受ける就労世代の乳がんサバイバーは多いが、その治療に伴う症状と就労との関連は明らかになっていない。本研究の目的は、内分泌療法を受けている乳がんサバイバーの経験する症状と 1) 就労参加、2) 総労働損失の実態および関連を明らかにすることである。

研究方法は、内分泌療法中の早期乳がんサバイバーを対象とする質問紙を使用した横断的研究である。データ分析方法としては、就労参加の有無、就労者における総労働損失の高低で分類し、人口統計学的、医学的変数、中等度以上の症状報告頻度について、マンホイットニーのU検定、あるいはフィッシャーの直接検定を用いて比較した。さらに、多変量ロジスティック回帰分析を用いて、就労参加と総労働損失に関連する因子を明らかにした。

結果として、140名の内分泌療法中の乳がんサバイバーが本研究に参加し、調査時に就労しているサバイバーは111名(79%)であった。中等度以上の症状は、非就労には関連しなかった。むしろ就労群は、複数の症状を経験しており、特に非就労群と比較してほてり、認知の問題等の報告頻度が有意に高かった。就労中のサバイバー110名(休職中の1名は分析から除外)において、総労働損失の高い群はほぼ全ての症状の報告頻度が有意に高かった。症状の中でも、倦怠感は総労働損失の高い群で70%と最も高い頻度で報告された。総労働損失は、中等度以上の症状数に有意に関連した(odds ratio=2.14, 95%CI, 1.58-2.89, $p \leq 0.001$)。

本研究において内分泌療法中の乳がんサバイバーは、症状が複数ありながらも就労している実態が明らかになり、症状は非就労に関連することを報告してきた先行研究とは異なる結果であった。また、症状は総労働損失に有意に関連した。総労働損失は、absenteeism(病気のために仕事を休んだ時間)とpresenteeism(病気のために労働生産性を妨げられた感じる程度)で算出するが、本研究参加者においてはpresenteeismが総労働損失のほとんどを占めた。内分泌療法は忍容性の高い治療と認識されてきたが、就労しながらも複数の症状を経験し、労働生産性が妨げられていると感じている乳がんサバイバーがいるので、長期間の治療中定期的に症状とその就労への影響を評価し、支援する必要があることが示唆された。

【総括】

本論文は、がんサバイバーの経験する主観的で捉えがたい症状の評価に適した方法、および症状と就労との関連を明らかにすることを目的として、2つの研究を行なった。

研究1は、がんサバイバーの倦怠感を捉えるのに適した患者報告アウトカム尺度を明らかにした。本研究結果は、臨床実践や研究でがんサバイバーの倦怠感を評価する際に活用できる尺度に関する情報を提供し、がんサバイバーの倦怠感の評価および理解の促進に貢献する可能性がある。

研究2は、多くの乳がんサバイバーは内分泌療法中就労できているが、内分泌療法に伴う症状を複数経験しているサバイバーも多くおり、症状のために労働生産性が低下したと感じながらも、仕事を辞めたり休んだりせず奮闘している実態を明らかにした。内分泌療法中の症状は、耐えて就労することは可能でも、就労生活の質を低下させ得るため、緩和の必要があることが示唆された。本研究結果は、内分泌療法中の症状やその就労への影響に関する情報を、乳がんサバイバー、医療者、事業場に提供するといえる。

2つの研究を通して、がんに伴う倦怠感の評価方法、および内分泌療法中の乳がんサバイバーの症状と就労との関連が明らかになり、がんと治療に伴う主観的で捉えがたい症状に関する評価や支援への示唆が得られた。これらの情報は、がんサバイバーと医療者間のコミュニケーションを促進し、がんサバイバーの症状の緩和、および就労生活の質改善に寄与することが期待できる。